

まねをし反復し質問して育つ思考能力

“まなぶ(学ぶ)”という言葉は、昔は“まねぶ”と言いました。つまり“まね(真似)をする”という意味の言葉でしょう。幼児は、見るもの、聞くもの、すべて模倣し、模倣することによって経験を記憶し、能力を高めていきます。

言葉の能力が著しく伸びるのは、二歳から三歳ごろで、この時期は、人の言葉をすぐまねて、それをすぐ自分の言葉としてしまいます。まさに、“まねる” = “学習”です。

だから、教育学者は、この時期を“模倣期”などと呼んでいます。鉄の真赤に熱している時期に当たります。この時期に、言語環境が良かったか悪かったかで、その能力に大変な違いができあがりますから、注意が肝要です。

テレビやラジオのコマーシャルをよく覚えてまねをするのも、この時期です。テレビやラジオの管理にも注意しなければなりません。親が下品な番組にスイッチを入れて楽しんでいるようでは大変です。

“学習”の“学(まなぶ)”が“まねる”なら“習(ならう)”は“なれる(慣)”ことです。

“慣れる”の古い形は“慣^なる”で、“ならう”はその変化したものです。物事を繰り返し繰り返しやって慣れるのが、“ならう(習)”ことです。

つまり“学習”は、まず手本を“まね”で、そのまねたことを反復して“慣れる”ことです。“まねる”ことと、それを“繰り返す”こととで、子供の能力が育つのです。

この時期の幼児は、だから“反復”が好きです。お話でも、同じ話を何回でも繰り返し聞いて聞くのを喜びます。同じ話をせがまれる親はつらいでしょうが、同じ話を聞くことによって、子供は言語能力を伸ばしているのですから、いやな顔をせずに愛情をこめて、繰り返しお話をやらなければなりません。

幼児が、物語をすっかり覚えて、親がちょっとでも違えて話そうものなら、すぐ「違う」と言って訂正するくらいになるまで、繰り返しやるのが、親のつとめです。

この時期の幼児は、吸収力が強いだけに、知識を求める精神も旺盛です。だから、見るものにつけ、聞く、ものにつけて、「これなあに」

「あの人だあれ」「ここどこ」と、質問を連発します。

この質問の答えによって、その子供の知識ができあがるのですから、幼児の質問は大事にし、子供が質問しやすいような雰囲気を作る努力をするとともに、質問には注意深く、親切に答えてやらなければなりません。

「なあに」「だれ」「どこ」という単純な質問から、次に「どうして」「なぜ」という、物事の原因や理由を追求する質問を発するようになります。これは、それまで単純に別々のものと見ていた物事に対して、これに関係づけ、結びつけて考えるようになったためです。

幼児の思考能力は、こうやって著しく向上しますから、忙しい時などうるさいでしょうが、真剣に、喜んで答えてやる必要があります。

ある時、ある所で、次のような事件が起こりました。空が夕焼けで赤かった時、狂犬が射殺されたのです。その時から、それを見た二歳半の男の子は、赤い夕焼け空を見るたびに、自信たっぷりに言ったそうです。「また、あそこで犬が殺された」と。

二つの現象の間に、因果関係を見つけようとする、子供のこの想像

力・推理力は尊重しなければなりません。子供の推理には、経験がとばしいだけに、稚拙なものが多いでしょう。しかし、それはそれなりに尊く、絶対に軽蔑してはなりません。

犬が殺された。赤い血が流れた。空が赤かった。この三つの事柄を、「殺されたので血が流れた」「血が流れたので空が赤く染まった」と結びつけたのです。

だから、逆に、「空が赤い」という事実があったからには、「犬が殺されたに違いない」と推理したのです。

この時期には、「……ので……」「……から……」というように、重文が使えるようになります。